

新カリキュラムにおける

看護の概念規定と看護学方法論の関係

城 正 子

〔日本専売公社東京病院臨床指導員〕

看護の理念は古今東西を通して同一であり、新カリキュラムにおけるその理念も決して異なるはずがない。ただ従来の看護教育においては、学生に教授するものが、その倫理観、疾病・治療に即した看護を理解させる段階のみにとどまっていたものを、現在になってやっと、教育、学問というものを遂行するに不可欠なその理念をはっきりと打ち出したということで、看護教育における発展の第一歩である。

看護への姿勢は変わりはない。しかしこれは現在看護の強化であり、看護学への強化でもある。看護の概念規定は、学生にとっては看護を学問としてとらえるための指標であり、看護を遂行する看護婦にとっては看護の基本となることであろう。

私は教育者と看護婦は多くの類似性をもってはいないかと思う。また類似性をみのがすことはできない。教育も看護ともに人間をその対象とするという点で共通している。実践科学に基づいた専門的知識と高いヒューマニズムによって、その対象を変容していくものである。そこにはまた共通の二つの徳目があわせそなわっているべきものである。

その一つは生き生きとして、情熱的であること。その情熱によってひき起こされたものをうまく育てるためには、慎重さと明確さが必要である。このように考えると、教育がその高い理念と概念規定なしにはそれをなし得ることができないとき、看

護もそれなくして成り立たない。こうした形で新カリキュラムにおけるその理念を解釈する。

またその方法論を問われるとき、両者には共通性がある。教育方法論しかり、看護学体系、またその未分化の看護の領域においては、看護学方法論を教育方法論と比してあげることはナンセンスといわれるかもしれないが、もし許されるならば同じであるということが言えはしないだろうか。

新カリキュラムにおいて、看護の概念規定と看護学方法論との関係については考えさせられるものがある。看護の概念規定が、学ぶものにははっきり認識を与えようとしながら、その方法を解くことについては、かなり未熟な点がみられる。理念に基づいて概念規定がはっきりすればするほど、実践科学の遂行においては、その理論的方法論が問われなければならないことであり、現に看護教育の第一線にたちながら、もっとも頭をいためなければならないことでもある。それは看護学体系の未熟さと、人間がもつ累層化された複雑さによるところから生じてくる。

方法論に関しては、たとえば社会学においても、不毛をもち続け、そこでは方法論は現実から逃避の場であるとすら言われることがあるが、理念がはっきりと看護界のなかに、学生の認識のなかに浸透していけばいくほど、その方法を求める声が強くなってくる。それは学生のなかに

も看護教育の第一線にたつものにも、理念に即した現実をとらえるための方法論が新しく要請されているのではないか。

現状の看護においては、根本的に考慮すべき諸問題が山積され、看護を深く見つめれば見つめるほど途方にくれることばかりであろう。しかし学問というものが、歴史的積み重ねによって発展されるというものであるとき、現に看護教育が今あり、育つ学生があるときに、また看護学という実践科学が理論的認識に基づいて、人間に働きかけ、これらのものを行動的に変革しようとする働きかけであるとき、概念規定と看護の方法論とは両輪として採択され、教育のなかに活かされなければならない。

理想を高くかかげればかかげるほど、現実とのギャップに苦しまなければならないことが往々にあるとき、学生にとっても看護教育にとっても、むなしい感傷に終わってしまっていないだろうか。人間の願望に対する満足は、理想と現実とのタッチするところにあるとき、看護学、看護教育のそれらのずれに対して、大きな欲求不満をもたざるを得ない。

しかし決してここで失望はしてはいない。ものの本質があり、その行動の理念があるとき、科学に裏づけられた方法論を解くことの可能性、いや可能はあると断言できる。看護の概念規定は、看護の方法を解くための本質を解いたといって過言ではないだろうか。